Vol. 21
文化学園服飾博物館だより
2008.4.1
BUNKA GAKUEN COSTUME MUSEUM NEWS

●●●新収資料の紹介●●●

昨年度、服飾博物館に新たに加わった資料の中から一部をご紹介します。

帷　子　江戸時代

帷子（かたびら）は麻を用いた夏の着物である。全体に風景文様を散らしているが、後裾には「瀬田夕照」、左前身頃には「堅田落雁」が配され、これらは近江八景の一部である。白上げ（糊防染によって白く染め残す技法）、友禅染、刺繍によって文様を表し、地色の浅葱を水に見立てている。なお、袖の仕立ては振りのつかない留袖であり、小袖の古い形式を示している。

ヘッド・ドレス
ウズベキスタン　20世紀初め

紺碧のタイルの建築物から「青の都」の名で知られるサマルカンドのクラウン(冠)型ヘッド・ドレス。上流階級の女性が婚礼の際に用いるもので、銀に色とりどりのガラスビーズで象嵌が施される。

パンツ（部分）　イラン　ゾロアスター教徒　19世紀

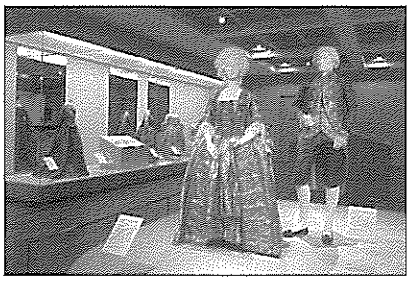
イラン中部、ヤズドに暮らすゾロアスター教徒（拝火教徒）の女性用パンツ。小花文様の更紗と、無地の絹布が巧みな色彩ではぎ合わされ、色鮮やかな縞文様を作り出している。絹布には、1ミリにも満たない細かい針目のインターレーシング・ステッチで文様が施される。また布のはぎ目もコーチング・ステッチで丁寧にかがられている。

ドレス　1895年頃　フランス

孔雀の尾羽根を思わせるモダンな文様の絹紋織地と、同系色のベルベット地で仕立てられたデイ・ドレス。大きく膨らんだ袖、ベル型に広がったスカートは1890年代の特徴をよく表している。ボディスにはもう1点、肘丈の膨らんだ袖に、衿元が大きく開いたデザインのイヴニング用があり、一つのスカートで昼夜に対応できるように組み合わせられる。本資料には他に、デイ用のボディスに付ける衿やカフス、キャミソールやペチコートなどの下着類も付属している。

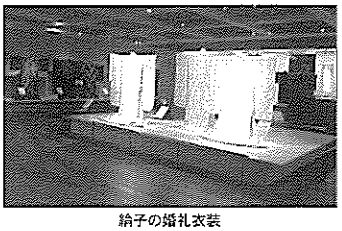
ヨーロピアン・ファッション　1760－1960
4月19日～6月13日

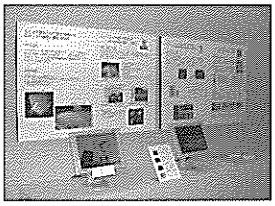
18世紀から20世紀に至るまでのヨーロピアン・ファッションの歴史をたどりました。第１室では近年注目されている18世紀のロココ時代を特集し、貴族社会を象徴する華麗な宮廷衣装を中心に、扇、テキスタイルも展示しました。衣装の組み合せ方や、後世のファッションにおけるロココの影響なども取り上げ、興味深く見ていただくことができました。第２室では19世紀から現代のデザイナー作品までのファッションの変遷を紹介し、ドレスと共に帽子や靴、シルエットを形作るための下着なども出品しました。社会的背景や美意識などが反映されて次々と変わっていくファッションを間近に見ることができ、現代のファッションを見つめなおす良い機会になったようです。


ロココ時代の衣装

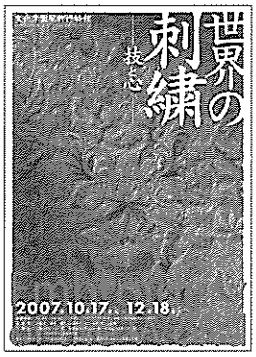
絹ものがたり　－日本の伝統服飾にいきづく絹文化－
7月3日～9月22日

本展は日本の伝統服飾の中の多様な絹織物に焦点を当て、展示構成を「きもの」・「宮廷装束」・「能装束」とし、それぞれの服飾に使用される絹織物とその特徴を紹介しました。また、絹についての理解を深めるために、信州大学繊維学部、財団法人 大日本蚕糸会、東京農工大学、株式会社 信貴屋にご協力いただき、蚕の飼育、蚕の研究、日本の伝統絹織物、最先端の絹などについても紹介し、絹織物に触れるコーナーも設けました。博物館の所蔵品以外の資料を多く紹介することは、これまでの博物館には見られなかった新しい試みです。本展はＮＨＫ教育テレビの「新日曜美術館」のアートシーンにも取り上げられました。


絽子の婚礼衣装


信州大学繊維学部の研究コーナー

世界の刺繍　－技と心－
10月17日～12月18日



刺繍は糸と針という簡単な用具を使って自由に文様を表すことができるため、古くから世界の各地域で行われてきました。本展では、世界約40カ国、130点余りの刺繍を日本、アジア、アフリカ、ヨーロッパの地域に分けて紹介しました。素朴なものから精緻なものまで、地域によってまったく異なる表現方法や目を見張るほど細かい技に、驚きの声が聞かれました。また刺繍に込められた思いや祈りが伝わってくるようだ、といった感想も寄せられました。展示の中では、実際にインドやパキスタンの刺繍布に触れるコーナーも設け、丁寧な手仕事を表と裏、双方からじっくりご覧いただきました。

インド、パキスタンの民族衣装

オペラ座の夜
－アントワープ・ダイヤモンドジュエリーHRD賞コレクションとイヴニング・ドレス－
'08年1月25日～3月15日

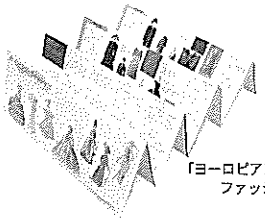
HRD賞は、ダイヤモンド産業の中心地であるベルギーのアントワープにおいて、業界を総括するアントワープ・ワールド・ダイヤモンド・センター（AWDC／元HRD）が主催するコンクールです。このコンクールではダイヤモンドの魅力を最大限に生かし、独創性に富み、洗練された技術で制作されたジュエリーを選出してきました。2007年は「オペラ座の夜」というテーマのもとに44カ国、1092点の応募があり、そのうち38点が選出、制作されました。本展ではこれらの入選作品と、このテーマにあわせて、観劇や晩餐会などに着用された館蔵のイヴニング・ドレスを紹介し、華やかな夜を演出しました。

本学卒業生 佐藤可奈さんの作品「夜の女王」

服飾博物館所蔵のイヴニング・ドレス

『ヨーロピアン・ファッション』刊行

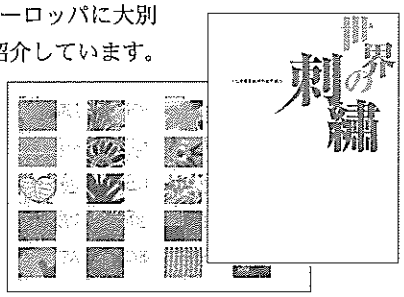
折りたたみ式のコンパクトなサイズと充実した内容で、服飾博物館のロング・セラーとなっているリーフレット「ヨーロピアン・ファッション」をリニューアルし、発行しました。このリーフレットは18～20世紀のファッションの流れを当館所蔵の実物資料と解説、年表で紹介したもので、服装史の副読書としても使われています。改定前よりも写真が増え、すっきりとしたデザインで見やすくなりました。



「ヨーロピアン・ファッション」400円

『世界の刺繍』刊行

10月に開催した「世界の刺繍」展にあわせ、『世界の刺繍』を刊行しました。この本では、世界各地の刺繍の優品を日本、アジア、アフリカ、ヨーロッパに大別し、35カ国、95点を紹介しています。刺繍の技法が良く分かる部分写真も多数掲載し、また別刷でA３判二つ折の技法解説集も付き、分かりやすい内容となっています。

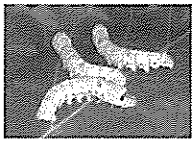


『世界の刺繍』 A4ワイド判（技法解説集付）
カラー56ページ、モノクロ９ページ　1,200円

「絹ものがたり」展　蚕の飼育・展示を行いました。

展示する蚕の状態確認

桑の葉の選定作業



４齢の蚕
（ふ化して18日目）

７月から９月に開催された「絹ものがたり」展において、生きた蚕の展示をしました。蚕は卵からかえって約25日で繭を作りますが、生育サイクルを調整し、展示では桑の葉を食べる蚕、繭を作る蚕などが見られるように計りました。約３ヶ月にわたる飼育は想像以上に手がかかり、東京農工大学農学部の先生のご指導を仰ぎながら、毎日の世話や桑の葉の調達などスタッフ全員で取りかかりました。途中、台風による桑の葉の日照不足で蚕がうまく生育しなかったこともありましたが、最終的には385粒の繭ができ、たいへん良い経験となりました。

「オペラ座の夜」展　オープニング・レセプションを行いました。

1月24日に「オペラ座の夜」展の開会式およびレセプションを行いました。開会式では、大沼淳文化学園理事長の挨拶に続き、AWDCのCEO フレディ・ハナール氏、ベルギー大使ヨハン・マリクー閣下のご挨拶の後、テープカットを行いました。開会式の後に行われたベルギー料理を囲んでのレセプションでは、日本人の入選者６名も紹介されました。また会の半ばにはハープの伴奏によるアリアの独唱もあり、華やかな夜となりました。

左から大沼理事長、フレディ・ハナール氏、ヨハン・マリクー大使

上：レセプションの様子
下：日本人の入選者６名を囲んで

館外の展示への協力・・・服飾博物館所蔵資料を貸出し、館外の展示に協力しました。

●「シルクロードをめぐる美の物語 Ⅲ　－東アジアから奈良へ－」

9月27日から10月2日にかけて、ミキモトホール（ミキモト本店・銀座）にて「シルクロードをめぐる美の物語 Ⅲ　―東アジアから奈良へ―」が開催されました。本展は、ミキモトがシルクロードをテーマとしたジュエリーコレクションを展開することに合せ、文化出版局『ミセス』の協力のもと企画されたもので、今回が３年にわたる展覧会の最終回となりました。博物館からは中国清朝の宮廷衣装をはじめ、シルクロード交易が盛んだった唐時代の白銅鏡や正倉院に伝わったペルシア様式を残す裂など47点を出品しました。

「シルクロードをめぐる美の物語」展 より

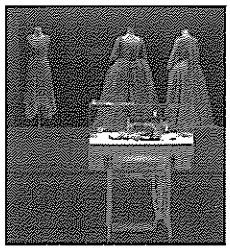
●「岸に上がった花火－宮永愛子」展・・・ドレス ３点

6月16日～7月15日　会場＝すみだリバーサイドホール・ギャラリー

●「エジプトの小さなガラスの円盤」展・・・ドレス 1点、ヴェール 1点

´08年1月26日～5月18日　会場＝横浜ユーラシア文化館

エジプトのドレス



「岸に上がった花火－宮永愛子」展 より

●●●・´08年度 展示のご案内・●●●
Exhibition Schedule

4月17日～6月14日　＊4/29は開館
日仏交流150周年記念　フランス・モード　18世紀から現代まで

文化学園のコレクションの中から、フランスで製作、着用された18世紀中頃から20世紀の衣装と当時のファッションプレートやファッション雑誌で構成します。
17世紀後期以来フランスは、国力の充実と共にファッションにおいてもその影響力を強め、現代にいたるまで常にヨーロッパのモードをリードしてきました。本展では、フランス・モードが華やかに開花したロココ時代から現代のパリ・コレクションまでの250年の歴史を紹介します。

ローブ・ア・ラ・フランセーズ
1770年代

スーツ
1966年頃
シャネル

『トレ・パリジャン』
1933年
文化学園図書館所蔵

7月4日～9月20日　＊7/27は開館　夏期休館＝8/10～17
中国の服飾　ー 清朝末期から近代まで ー　（仮題）

今年は北京オリンピック開催の年にあたり、さまざまな角度から中国の文化が見直されています。服飾博物館では開館当初から隣国中国の服飾の収集に努めてきました。この機会にこれらの収蔵品の中から、中国最後の王朝となった清朝末期の宮廷衣装をはじめ、革命や戦争を経て激動した近代の服飾を展覧します。また中国の影響がみられる周辺地域の民族衣装も紹介し、中国と東アジア諸国との服飾に見るつながりも探ります。

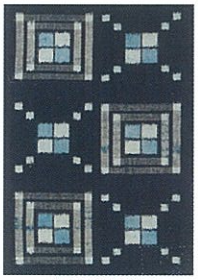
女性用衣装
19世紀末～20世紀初め

龍袍：ロンパオ
18世紀中頃

女性用衣装
1890年頃

10月10日～12月22日　＊11/2、3は開館
世界の藍

藍は世界各地で古くから用いられている植物染料です。蓼藍（たであい）、琉球藍（りゅうきゅう）、インド藍、大青（たいせい）など地域によって使用する植物の種類や染色方法は異なりますが、堅牢であるため、多くは日常着の染色材料として広く親しまれてきました。藍染めは、染料を浸す時間や回数によって濃淡を表すことができ、また、絞りや絣、ろうけつ染などの技法を併用することで、多彩な表現ができます。本展では、日本の武家や庶民の服飾をはじめ、アジア、アフリカ、中南米の表情豊かな藍染の数々を紹介します。


布団裂（部分）
久留米地方　明治～大正時代

男性用衣装
マリまたはニジェール
トゥアレグ族
20世紀後半

女性用衣装
中国 貴州省　苗族
20世紀後半

´09年1月30日～3月14日
おひなさまと装束・調度

3月3日にお雛様を飾り、子供の息災を願う慣わしは、平安時代の子供の人形遊び「ひいな遊び」と、3月の上巳の日に、禍（わざわい）や穢（けが）れを人形に移して水に流す「上巳（じょうし）の祓（はら）え」の風習が結びついたもので、室町時代に始まりました。江戸中期以降には、雛人形と雛道具を飾り、「雛祭」の行事になりました。展示では長門萩藩主・毛利家より大村益次郎家に伝わった33体の雛人形と細部まで精巧に作られた40種余りの雛道具とともに、実物の装束類、化粧道具や文房具などの調度品を紹介します。

内裏雛　江戸時代末　毛利家伝来

角盥（つのだらい）　江戸時代末　伝 和宮所用

袿 袴
昭和3年
三井苞子着用

＊上記の予定は都合により変更されることがあります。

Information

- ● 開館時間　10:00～16:30　＊各展示会期中2回、19:00まで開館（入館は閉館の30分前まで）
- ● 休館日　日曜日、祝日、振替休日、展示替え期間
- ● 入館料　一般 500(400)円・大高生 300(200)円・小中生 200(100)円
  ＊( )内は20名以上の団体料金
- ● 交通　JR/京王線/小田急線　新宿駅（南口）より徒歩7分
  都営地下鉄 新宿線/大江戸線　新宿駅（新都心出口6）より徒歩4分
  （地下道出入口O-1に隣接）

文化学園服飾博物館
〒151-8529
東京都渋谷区代々木 3-22-7　新宿文化クイントビル
TEL. 03-3299-2387
学校法人 文化学園　http://www.bunka.ac.jp
文化女子大学／文化ファッション大学院大学／文化服装学院／文化外国語専門学校／文化出版局／文化学園服飾博物館

文化学園服飾博物館だより　第21号
編集・発行：文化学園服飾博物館